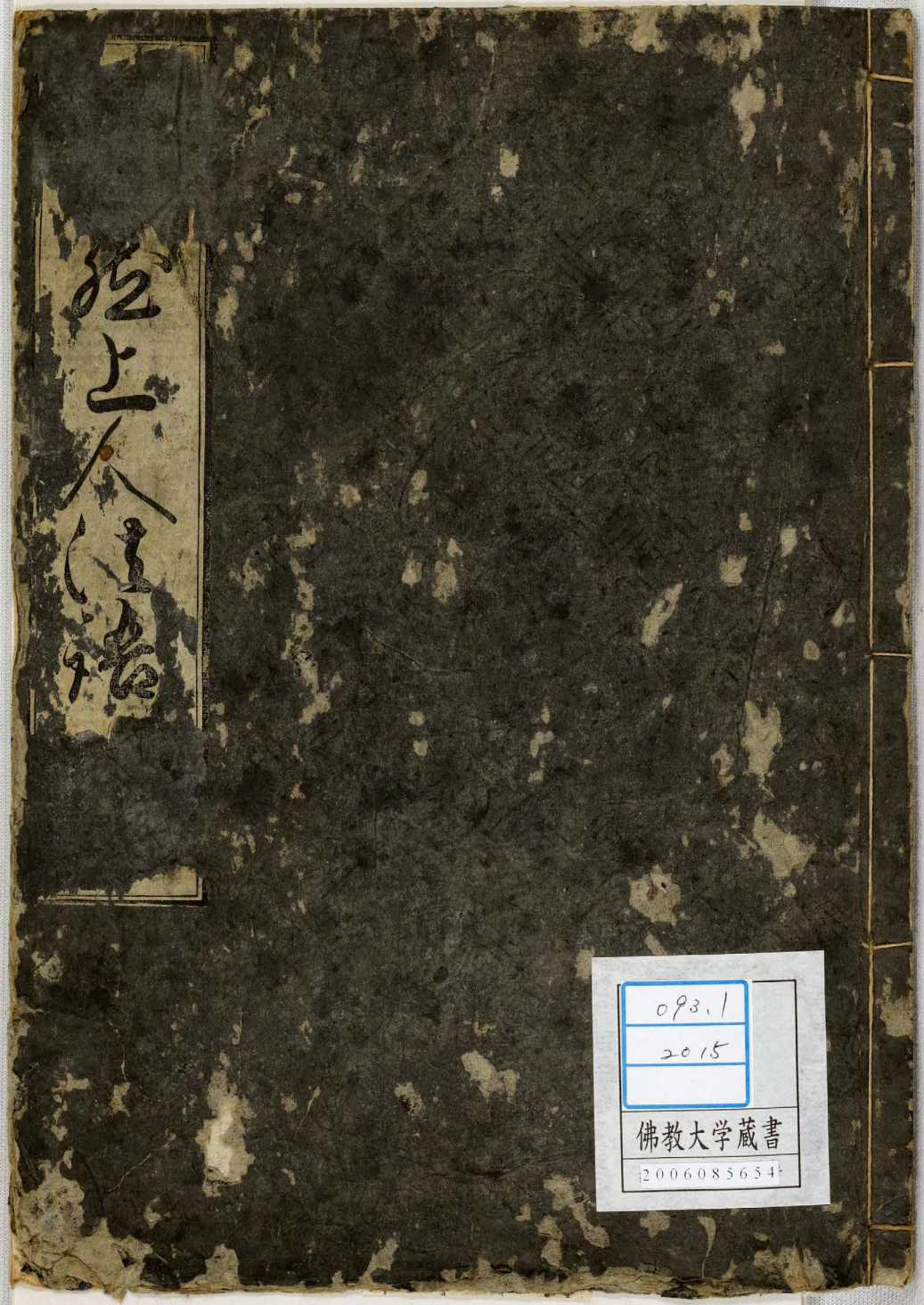


093.1
2015
佛教大学蔵書
2006085654

法然上人法語抜萃之序

七冊之内

越後 西脇吉 小千谷

信濃国善光寺上人法師の図あるべしや。志ゆゑ
ふかき時の会は老上人の却へまもむれいなり。これ
を奉弘法師まるうんで法師をうらぶ事則荀
卿をうけて秦王をぬくうちひとを思ひ漫漫つま
りといへども。事は九年にあらず。秦王上人のうた
ぶ。れおとるくぬるをうぶさのうはをの
籍を用ゐてあ一ふうるは指の指をうは法
て紙世れ凡庸の首莉に擬するあるり

法然上人法語拾草書き一月録

一三箇のゐくの事　三紙六行
一さんげの事　五紙三行
一鬼より飛うくる事　七紙四行
一殺生の事　九紙十行
一六斎日の事　十二紙二十六行
一六道の事　十五紙十行
一聴恵の事　十六紙四行
一菩薩戒の事　十九紙十行
一陀羅尼の事　二十三紙三行

法然上人法語撮萃巻之一

菩薩戒ノ弟子穜雨述ス

一金剛宝戒章ニ曰。三帰ハ者。帰依ス佛法僧ノ三宝ニ。願ハクハ出テ魔界ヲ。懺悔ス無始巳来ノ之罪ヲ。　略而取要後倣之

此文は。三宝をうやまふの事なり。其のいんぞくをまもれ。
無始よりつくりし罪をさんげするとなり。私
に曰。是のかまで天の心ぞくくわりとも。又かの利
三宝をうけぬればバ仏の弟子と如なり。一戒も持
たゞ。三宝をもうけぬ人ハ天のしんぞく如ぬる
されバこそ宋の世乃季法と云人。死て地獄よ
おちて生きのゝ僧道の法師まおふ。此法
師をとらんまゝ王。これをてうて恭敬なり。僧道季法よ

おしへては。此念仏はぜんちを海にはべし。それより
ほどにおもしろく三経をよみけるよりばかりくる苦
愚のものへまゐるべしとて。織なりける。冥祥記にいはく
くるしければ愚人の数をのがるゝには。三経を
うらみ奉りて。は。又現世にもするわりて。
王の。驚魔の聖をのがれのひしも。三経の法をあ
らずや。諸仏三経をけらる人あらば。九族の罪つ
ねに消りなすが。もろの仏ほとけさうみやうの仏経
まもりければ。善導和尚も。五部の書の。初めにを
しへなかで三経をくるしからざりなる功徳を
ゆへにやよんでも。よむ書の初めすなはち三経
をくるかるふにぐちの人もとてもおもひいれ

このたびぞかし。志しあるひとは時は。善導和尚の弟子へ
まゐるに。三経ふかく右をば。ふかくもさかへでは。ぎんげは
如何ならんも。いかなる人もはげはげして。口ぐちくと
念仏をとなへ往生をとげしとは。誤りなりや。みな金
剛宝戒章などに人は念仏はいりてはならずと
ののしりけり。是にとくに書の中に。又近抜集と云。私
の書籍にて。とくに往生の時ぐちのへくし。此書は
上人の念仏は入なりけれ。此等の書なりとしるしければ。
此戒をさとるなり。上人は老衰まで。念仏と戒
とをおやめのあいだ。日々のうちに内裡にまゐり
ふても。七日がわりに。戒を授け奉り。念仏は
入あひての頃なり。又おもふに其教書にみえたり。

き人の品々くやくのごとの者はさんげ法
じとなり。教会へて品々懺悔をもはらとけれ人ハ
ひとくくやはらんかくの人のこゝろあはせ会仏刹や
んげをりとなり。言葉和尚のこゝろ毎ふをしへらまく
ふ毎あるを。知恵の人をつぶやくこゝろ雑きまぎ
をつぶれば世間新ふんくハ必行ひまぎゆ人ふ上
代の祖師ゝ法ぎんげのこゝろ毎ふ。いづれふ
ても弱きをよろこびゝ習へ会利弗悔
過経ふ。晝夜六時ふはらあるとあり。行ふ物
ふ行すでゝ意地をくゝ。さんげをあり人ふ。
そゝを法とあれんくハ。字六万四千ふ。地獄
の苦患のゝ。ゝとゝそれ普賢観行のさんげ

の文ハ経文金光のをしへをもとゝ。ふ法
けはりぬおりて法とあるべし。さんげの唱者。
り明うんの意あれハ業障の服さゝ。品天
業をゝんで。ゆをゝ会ゝ。そを服を
さんげし法のふ音の業をゝ。ゝ名ばく。耳
うん能弗を。和合のゆを乱ゝ。ゝ。牡
能を和ゝ。牡病ふんこゝのゝ。品業を
んで法空無おを歓ずべし。ふく一切の意をえ
ゝれ。天耳十方を。異相法書ゝ。澤
ふて法の鐘をおとくのごとゝの物ゝくの異深
ふ。法摩をゝ。大乗経をゝ法の
外実際を歓じ。ふく法の意ごゝをとゝれて

法世又生ぜず。金剛の如く種の色ふ善ごとを起さず。
ゆえに心識ともいふべき法なれば。清淨にして惡を作
し。法を破ることなきゆゑに。のりのくのゆゑ別のおもむき
なし。人おのおの猿猴のごとく。ものもいはず。
ものわかちなんとこころざすべし。まことに大乘
をもつて法の大義分かを異にすべし。
分の樣開のまことり。塵風をもつて惜ばるごとく
ものを觸れうる種觸し。自在ありて罪穢なし。
ゆえに色を觸れんとこころざす。永く法の塵穢をなす
まことに法のもんの機を觸ずべし。安樂の法門
てこの大業を濕法のおもむきの母をまもるべし。
罪の法を仮の方をもつてこころざすべし。

のごとくこの法をばけして六情根とす。一切
業障の法をもつて生ずるなり。
とこころざして端坐して生ずるなり。
ものごとく自ようく滅除ぜれまことに
て六情根をもんげすべし

同書曰。摂律儀戒。授諸惡自止。制他永斷不造。
永制自他三業也
けんぶ。摂律儀戒とは。りつのこの色をもつて
をしへあらためて色をもれるなり。
もんもこのごとくをば。
しびもくしびも。戒をもあすあ色をもあるとを
もへのもつもれば今時は勝家のへ戒をうけ

悪をやめる人あれば、上人のこゝろをくみ給ふ事
うたがひなく、へまもなき悪のこゝろをうつ
さんとて、やがてまことうして戒をうけ給ふ人なり。
ゆゑにこゝろざしふかくずや

同書曰夫受戒、最勝大善根也。此受戒之功德
者。是大菩提之因也。大悟成佛之門也

はじめ戒をうけ給ずして、大菩提をうる事なし。
のゝしるこゝろざしをうして、ぜんぜんの門をうる。私に
師匠の口むかしより家の師匠、法を授
てさとりをねがひ給ふ。師匠の口
授戒をうけ給ふ。師匠の口
怪異のこゝろ。戒をうけ給ふ。
なりとの給ふ。

りをうる。戒は諸仏の師匠といひ、禅宗の戒、律宗の
第一とこゝろ。それ諸仏の法をうる。律宗
をうる戒をうけ給ふ。
まことの戒は世のこゝろ
ゆゑに世ふしもの世間を隔てうる戒清
世間の人。戒をうけ給ふ。
家をうる。
金剛の人。
生をうる。
食を供へ給ふ。
人間より。
何の功德ありやと問。仏の戒の功德を
別にあり。
ぶつ仏へりんとして出るぶつりんこゝろ

家するとは男宿をもとめんとおもふ女の心々くさの鬼の
妻なりといへども心のどかに鬼にくはれぬべし。
たとへば恵の人へといふは男心のやさし。家出家の人。
戒をしらぬ鬼也ふかき戒をまもるべし戒をやぶれ
ぬれば必鬼にくはるべしとおもひて家に居ぬ。
野にて其あばら屋の鬼はゆりて入れば戒の守護神あら
くおそれて、皇子もあばれふかければ男宿
あけて宿をもとめけるにすゞしさや彼女をつれ
出なり。妻はなんと宣旨きおとりて女を宿に住
ありし男。女はもとよりのんきにて佛の道を戒を守
まもれば戒の守護神ことくまもりふさぎ戸をあけ
の鬼あらねば男の只今鬼にくはれんとするを知りて。

女が男をともなふは鬼の中にても見えぬ程の鬼
となりて悶ありやらんといふ女の思ひは家を出で
て知らざりきと問ひ鬼の思ひ戒をたもちの弟子
の坐をもとめんとしりや其家の戒の守護
神の家を守りてまづ千里の外まで追払ひのぶ
おそろしき事もうれしさに姿を見するに驚く
有る彼おそろしくもなりて今もむかし中す
にしも女の思ひ戒をなをざりにすれば鬼の心家に
おそろしきものをにくみて戒をたもつる
へもちいふにて家の心をもなくしといふ女の心
いづくにもなしといふ鬼の病に女の根を
しみにもぬ女のにこり戒をよく

うけうり男茅の中にてそこなひてうけぬ人の命終病うるを男女ともに中の為に薬をいそぎこしてすくをもつ人に男女ともに薬をげをもつ男茅の中にてまむ女をつひにうんだく茅をうつをしてもとて茅びわ女の紙茅ひむしてそこなひ婦をうつく男をうつ燃しよりうしよ今は病をうけ男をうをもつ。その恩をもつとして男をうして仏へりうでどもをもつ志羅漢の男をゆとあり。そひうへ病の苦をうずやうちるふぐうをうつ。病をもつるふんくうをうつ。苦をもつ今はとてもうけるふくくるる苦をうつ

そひちりるべしはれも男の命をうふもをつるのぐ制儀邪をもちまちるんぷのちるぐ多人の識れるひだりの命をもぶさびをるのをりよくくいれはくもるの人

一同書曰殺生於在家勸信男信女或六斎日或師長父母主君國主及有恩死亡日殊可制禁はんは殺をもつ病をの茅女つるうくくもをして六斎日人師道父母主國主。恩をうけうる人の命日ふ必持てとるり稽。それ殺をの飛ぶ切の通るすべれるり。殺をさうるやぶ今はどちのんくく殺をを知れるぐ。とい殺くはくはど苦初徹よをくくるぷい

くはしきが殺生とも云縁によりかるくいもさらく
しずでたりにの罪のこ造りのふかかりされ。燈火を。
后園の風にて消ほさんまゝ。風にかくり。蛍。火によ
觸れて死すべしと。此虫ハ罪ふかく。けかぞらし。
又蛇をもたげ。虫第ふかくりて。虫の死かかるを数
くぎりなきべうりに。志ぞもてちくべき。而すれば。只哀ご虫
の由ねさぞふ曉さくえきの人かくる影ひとなり
甚し浄土の祖師名禅禅師さへ。悲いには虫を
殺しけれバ。はまのさかりとまもり。又むかしの
こう。京兆の安仁が拝をさん猫をぞ浄土にて聞く。殺
て彼をまるまて生れ。まは行て。鬼ふかまりぞ
なりてのぞむにこまにて殺らし猫。今怨を

おんまゝにしていかりてのへ。怨みをいきまさるる
と云。安仁が曰。我は此を得るるかなりぬかなく
いかにも猫に備てくべ。然ずありて正善すべし
と云鬼の曰ばかし猫に備てかんとけばかかす
みまるべし。るいしけるをかふみ気きまるしと云て
去ね。それ鬼来りて。安仁なるまゝと庭苑
殊にきるさんとりけれバ猫のゝきさん。怨を
用ひいさりふも。獄卒丸すまるぞくし。正言
おんと備ずんばあやくまし地獄ぬべし。又猫の死
服するつぬ蠶のここ。悪る人もあるべし。
りこし遠業の婦人。背痛を愁ひて。死もし
なかしきふりしもありけば老ある時に痛る

人はかく罪もろ〳〵んがくさりの人ぐ名聞
のちふて義のかりじよく罪も深うらん知み行き
出しても何事も虚妄ならざれば心ぎしもべきさい
はまなし。其外人は梵網経にも説きつくしありぬるも。
殺生の罪なりと説き王のふかきりやは
さうれ功ありて。狐の野ひを奪ありて。彼鬼縁の
めまうし悪人の奪とて喜人へゆけと頼ひ
のへさうが罪深きじ。まさん。師子の妙を業
ては。古難は師をむく人中を生れよとなり。
野て彼師子。忠孝の子は母れか人の手子をぬ。
修りぬ殺志。彼法を出て坐しりける。譬喩経
あるしらず。りうこししる傍と云人。殺生まれける。

二千年がうり如しが王所食んごとるまでぢゆのろう
とまて狩猟あつまり。おもゑ殺してやりてうかゆぞを
は千日ずうりへて物りくまづひ。彼なきるまど
も云侍りしが三百色てまんがゆまり。縁り云する。
久しさ遂すめ人。遙さて。家の飛の禽獣と
名のり。きあて口。此二千年。殺生をざり志给はれ
衣ひらつき所ひ。物くふうも。仰るもなくおち
志す何とて此が家ふて。殺まりや。此罪ふし真
おのづからまん。と膝つもしまさゑぐは備に平
生の修りの徳よのてゆるさまこふきことなす。
宗の傳よのへくらり。今日の人世志よぎまる野ひ
なき。殺ね人もまさず。彼が苦労をとすけれて死

まおうんのいましめ。在世に老比丘。乱気をひきおこして。
地に捨しまたはいましめのなかにて。縄の中にありき。
罪人の王に合掌礼拝をなさんとすれど。よく墨にて。尊重なさんとすれども
あるときやしなはすべしとのことなりけるに。玄律に
みだりに又は頓じて淫欲楽狂に帰して。あらゆる処まで
も。無畏を殺まじと説のまゝにそのたびん狂の王とて
も。殺すべきをおそれぬやうにまもるべし。
淫欲楽狂の大慈ハ一切善根のたねとなる。瑜伽論によ
ハ。かりたる。あはれをもって。たと心を説のたね。これ
楽をあまたる心はれなり。大乗の伝法に日あまま
このなを斎度のなにかたむかさ。ひまと生れ
出るものをとりなぞれバ。ちさき虫とても。同類

こゝにはかざさらのまれのおもみも知べし。彼をあ
はれみ害なき家をまもりのあへべし。ことに転化な
らバとも。皆其の家の子なればハいかに娘く
さる恐しき慈悲のんあるきの。病ひぬる犯をと
も。をんかまるうへバよも。鉄てんの其やしまし。又脳
の其殺に業あるへし。報ひありて。月日
知する者はいきれ其のちかく害に相当る
もの罪さる日をなる人に移して地獄におとすべし。
目連尊者のしるしの新婆沙論によりて。
それ曹操が戦場にて。軍士の死にける
おこりの所作のなかをへ悩みのさんかよ
よりひくるしきんにそれそのゆゑの親の遺

律師のうへにハすなはち悪念法師にこゝへやらんと
おもひけるに数丈の妙荘厳法師ハある月にいれバ聖衆の
中に座をかまへてひとへに法華をよみける其の中に
まことにふかきことはりなれバとて大乗経をよみてちが
血をすゝりてかゝるのこゝんと如くしとの心ふかくそれ陽
和の鶏肉を浄土の巴西が庸の子をかきとらしめしかば
如くかく付ハ絵を図してなすけて蓮のさんしんを
け蓮夫ハ詳するにもゆるかして其の聖の陣をゆるす。
現在の音なり。みやうに微が虎とさり志あしく
も恐れあへる五十日のつみはこの経をとくにやうとき
餓鬼も功徳経をよみ人六十日にとくすれバとりよ。
仏がさりぬるにて七宝もひだりの肩にふ偏生

持斎せんの肩に常に持斎してちかひのかたき女人
は日ハ称してすゞしく女の身をとてん必浄土に往生
八日ごとの八日にハ天の帝釈は世界にくだりて衆生の
善悪をしるしあらためて八日称して薬師如来を念じ
ば四十劫のつみをめつし十四日ハ八万劫の罪をめつし
あるひハ日称して普賢菩薩を念じ千劫百二十
劫のつみをめつし十五日にハ阿弥陀仏をねんじ
あるひハ日称して観世音を念じ千劫のつみを
めつし二十三日にハ大勢至の大悲をねがふ。
日称して勢至菩薩を念じ千劫のつみを
めつし二十九日にハ薬王をねんじ日称して薬王
菩薩を念じ四万劫の罪をめつし三十日に梵王

くだりあるなり。ぜひ毎年にて、粉色ゆゑを定めず。
年方勘のつきめいぶんなりといひ、女房毎日毎を
きつぶるき非人をあつめ、ぶんぎ法の業
四よりあづかり、ぜひをこげうりぶつ毎年されぶ年
いろのゆゑをぜひ日毎年人、年勘のるぎ、ぶ
ちぶらいぶ弾のごとく。唱ハ計のごとく。腔公
のごとくあてぶくの義をうるり。毎
日をぶ月あてぶ毎るぶ義ごとくるんぶりん
や料ぶはるんぶ毎をよるぶつぶごとぶ
くめんぶ切のぶるんあるぶ十方の像をけまん
ぶ毎あり。ぶ像を三時行ぶ方毎ぶ放ぶうん官
女をぶ方節天より。二十人の義行をんぶ。ぶる

まり。西京のさうりをのぞきをのおのさうんをく
らいをあるべしあり

一同書盗戒釈曰。設雖有軽重諸律所不放盗罪
也。殊寄事三宝是盗罪之中重也。

ぜんハ像盗ぶりをぶりぶるあれぶぶ
の像部をゆるぶるぶりぶ。三宝の義をり
てぶあるぶんの用ぶをぶる。用盗ぶと
いるぶぶりるぶ。義ぶて行像ぶる。
像義ぶぶ敵仏物とて生仏ぶる像像
とふゆゑぶ仏のあり像事行物とてぶ
行像ぶ像ぶよりるゆゑぶりるぶる
るぶりるぶの郭ぶ義ぶ一片をひるハ

て。火焔地獄におちぬ。又ハ淫乱一種をのぞけバ
さてらハ。鐵丸地獄にもおちるとも小史傳
まんとらり。みんの秘事お書籍をはげしくえん
るを。なりまてろくをりとも。こゝにぬすミのつミとなる。
あて小世にころすのやちてまたらハ世まんのほまれ
仏まぞえみりのまたりてこう命もやすくつゞ
くるれとのすてへて何の人弁識をびいふても仏
のまへまるまるゑおぐでなまハ自分のくあふも自由ならず
とらでて拵ゆのゆるさばなこうの自由も自由なる
今ハのぐものへ拵ゆるものもいうはなぞてかどとえ
おをこうのぞうりのびはまやうあうどのるとて仏の
抑まのい生まけハ自分して自分のくお

まきのかすりのはまとこゝのろて大飛をはなくりあまりなんぞ
あつかるろ

一同書妄語戒釈曰。妄語者是諸悪之源。破戒之長也。夫好妄語之者。破諸三宝善神之本誓之悪賊也。截諸仏善神之舌根之毒力也。此世界有守護神四神。殃妄語之罪。紀破禁之穢。忌生死之穢。須忌造罪之咎。考造罪之咎。無重於妄語之科。若欲應仏意者。當明浄戒。欲称神意者。先可称仏意也。故可正妄語

ひんハ妄語ハおろくの悪のこゝろなりとまり。戒をや
ぶる事ハ。妄語をこのむ人ハ。三宝仏神のちかひ
をやぶるぬすびとなり。法仏諸神のいかりをまぬがる。

[illegible]

一同書曰酒者能引人令入地獄經曰酒者爲毒中毒地獄中地獄也

[illegible]

[illegible]

一同書曰瞋心是能破諸戒之源若有瞋心起猶殺自身命一切惡由瞋心

[illegible]

偏に天帝仏となりたまふハ戒をたもちたまひしゆへなり
もろもろの仏のまもらせたまへハなりされハ仏のくらゐにも
いたるなりよのつねの人もこれをたもたハ聖賢の位に
いたるへしとなりされハ愚人もこれをたもつときハ聖賢
のくらゐにいたるへしとなり愚人ハまよふ心あつくして
聖賢の人ハさとりのこゝろふかしいまの人のこゝろ
へたてなくおこなひてまよひの心をすてゝ聖賢の
さとりをもとむへしといへとも今の人のこゝろハ
なかなかおよひかたしといへともおこなひて
をこたらすハ聖賢のくらゐにいたるへし
衆生もまたしかなりと聖人の心をしるへし
しゆれうこうしひとさとりのさとりをもとむへし

しるへしとのたまふ今時の人くらくしてさとらす
くはしくあきらめてみるへき者也
ちよくいへともおもしろからす

一同書曰夫戒法佛家之要門衆道之資糧也七衆悉趣三宝鎮護舎那本心因茲顕有情沈迷従戒悟所以持大戒者貴本覚於一念杖本又極僧祇於殺那

此心ハ戒ハ仏法のかんようなり一切のしゆしやうのたすけ
粮なり僧もぞくも三宝法身のかたちをまもり
なくなりけれハ一切衆生のもとよりふしきなる
戒にしたかふゆへにさとりをひらく戒をたもちて
本来一念のあいたにさとりをひらくさかのほりて

修りをすこしもの乃ときらいむるなり。私ニ戒を
うけんぞんぜりもやはらさもなりあり。ひろ志
の強意ハ戒をうけて寂の病いハ志ろ法花
珠林ニ云ハ戒をあたれハ獼猴よりハ
ハ獼猴ニとらさるなり。とこしなへ世志ぬ人なりとも。
世のくるあるもうけの人ハ帝ハ戒をうけ元旱の
学をあ梵鐵ハ学戒志て割刀の若をのれ志
るハ法ぶさる史伝ニ云ハ。又四夫戒をうけ悪
鬼の羅をのぞさしる。膝を喰ふるなり
一同書ニ曰。持戒者非無後益。人天報尽之時若落
悪道者成防羅人。其破戒者成罪悪人。為彼可
畏若入餓鬼道者。樂不浄食若没畜生者。持戒
之者成其中王。修羅道亦如此
けんハ戒をうりてハ。あらくんハ人ハ志
ろうすれハ。ぞくくあるもの志ろ法さそ
悪ハ。あらてもむ志の戒のでくハなるを
しるハ志てハ。ぞくのそるまでもつさ志ろハ。
人のつくるもむるなり。破戒の人ハ志ろ志て
をくるなりハ。ぞくあらても戒をも
ち志人ハ。ぞくあるハ志ろ食ものもさ。むけの食
もハ。ぞくなり。破戒の人ハ食ものもさ人なり
なりハ。ぞくまるあらても戒ハ志ろ志人ハ。生中
の王ともなりぬ。修羅ハ志ろくのごと志。私ハ志ハ獼猴
ハ比丘の天ハ志ハ。ぞくハ法私要法ハ志ハ。

上人のことばをよく受持するあるべしやそれ戒なあるべくんばてをもつさんべきなりもしてんぜをよくこころをもちくんぜんのうのごとくなり

一同書曰草葉木枝一モ不損不折受持也草木既不知於有情乎縱雖殺小虫一ツ一犯一切犯故若破一戒一切戒破必墜悪趣也

ひんぱのくものごとくなるべしてもおろかなる戒をくるしみなり草木人のごとくなるべしやんあんぜをやすくひちくさきとても殺生くるしんなり戒やぶるくるしみなり

一同書曰不恐佛制禁破滅戒相之倫穢諸神社佛寺皆是誹謗正法之罪人必墜無間之佛敵

ひんぱのくものごとくなるべしやそれ戒なあるべくんばてをもつさんべきなりもしてんぜをよくこころをもちくんぜんのうのごとくなり

一同書曰人一時一念受持大戒功德成就則位同八地菩薩学功縱有破法必定當作佛轉輪王然後或一生或二生三生成佛無疑

ひんぱのくものごとくなるべしてもおろかなる戒をくるしみなり

出てきたる一生涯をまもりて。如法にたもつべし。私
にはそれ戒ばかりをあつ。てびらけはまぶねをつと
ひやぶりてもらるめでぐふぐうをいぬそのち
如法きんりはかりぐさきょいまぐずやあぶりてぶ
ゆもくぐくありばれば戒うけてそんなるたらふ
今はぶ勿へうをむさうけてもはるあぶりるぶい
がきんとてうけれ人はおまりまぐちのぐりまり。
それはまみてぶくいの地よりはあ上代の如西とても。
くゆすうぐ会利のお行ありぐくまあぐずやその
如怪微の禅師孤てぶん名まるふまぶ地よりは
くぶんくらり。易修易りの会仏のりまり志三云
ぐくすれば孤てふくいの地よ人ぐまくへ世ゑまれ

るるべぶまうあはやきん戒ぶてびうけくぶけ
出ぐまりぐくるはるまくぶてはるまれ
ぐこれいまるぐくぶふくいの地よ入はあぐずやうる
ゆ人ゆや菩薩戒孤ぶ戒をうければ如来内
まるくいるりくありうく上ぶうりみ戒をか
めるふはるぐ今新りとくあゆやぶ菩薩ずれ者。
てん会仏のまゆ弱まて新りとあゆそれまう
つぶ孤孤まれをゆ人ぐ人のぐくぶまうをえうゆ
あくぐ如来ぐちの志ぐくりぶ菩薩如来ぶの
書ぶ法門分ぶ千わりぐはまを修りはもぐく仏
をえべ一ぶ孤の法を修まぐはうくをいうるゆす
くあくくもゆ法をはくうるゆりしとぐまあゆぶ会仏の

[illegible]

一同書曰持戒息十惡名十戒是名十念称名息四十八惡云四十八輕戒是名弥陀六八之願

[illegible]

一同書曰戒者十宗之祖衆教之師也凡求入佛道之人必受戒若人不受戒者不得比丘比丘尼名即得法名依受戒也

[illegible]

一同書曰律禁制諸惡之頭自也勸發万善之祖税也如來之方便衆聖之後益以是為先

[illegible]

かどこれみなは戒をやぶりしものなり

一同書曰於念佛作不足思受持者是雜作也不然而但不受戒不名人但是畜生也故為通佛法之威儀更不成雜行也

ねん仏は念仏の功德のみにて往生すべしといへども戒をたもたぬは雜のなり念仏を行ずる人は戒をまもるべきものなりされば念仏のみにてはなりがたし戒は仏法によりてある威儀なりさりとて雜のみにてはなきなり。私云念仏を行ずる人は戒をたもつべき人のみなり。上人はまことにまもらるべきものなりとてひとりもかゝるふ[illegible]よせぬなり

一者相憑文者不知真言敢無為開眼師唐代以來用佛眼真言

ほん仏のおかげにて極楽のきやうじやう[illegible]おりは釋尊のよりておこなふ人すくなし。されば真言をもつて開眼するなり。唐の代より仏眼の印にてとなふなり。私云仏眼は佛の階級なり。真如の妙理よりてはおのおのあらん。行のよりて[illegible]金剛薩埵の[illegible]にをもつてふかきゆゑん。音声をもつてこれをあらはす。ほん仏をつけずるものなり。此事をしるべきなり。釋迦の先德仏をまもり。釋迦の如来の[illegible]如下今時の世にはおほくも[illegible]もつて[illegible]なきゆゑなり

ようふるまもなくうてあることぬべし。唐の代より此事とか
いまそのほう唐の代。玄宗皇帝の時。初て五ぢくよ
つ。金剛智がさんぜんまりのもとにありしとき
ぞくしてこぞうあり。それ紅塵のるいのなかにあり。ぼだいさんぼ
ぢくとこそいふなれ。ぼだいのいとなみ

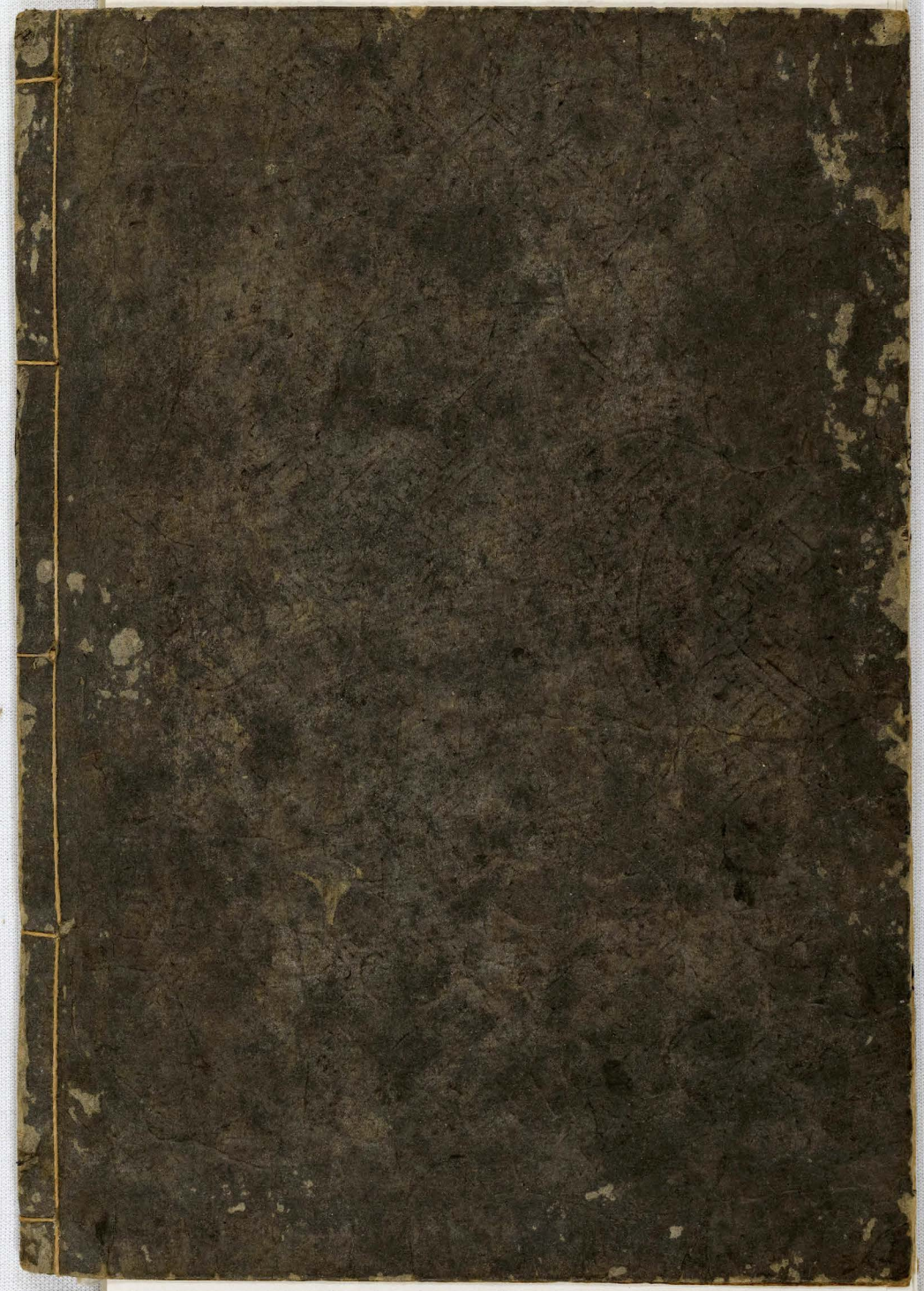
みてぶつやをうごかしぶつをうごかしまぶいまうけぶ仏を
おがうまつり極楽へうまれぬべし。ぶ法をぶ人びうまや
を少まとあらぶ仏。元のくんの国のぶうまうたぶ
みて。ぶ中みなんこうくしぬれぶあうぶ仏ぶ七ぶを願あ
ふて極楽へ生まれぬべしこれを金剛仏経の仏礼な
らびに石室羅漢経よりぶうまやのうへに
普照院の智園法師母のたぶいまぶをまやをけて
ぶうまぶりたる。芝園集より。ふ宮実ぶうまを
うぶうまをまて塔の中へいれぶあの仏ぶひぶんぶく
をぶとのうるなり。ぶ人むくんぶうまうべきも。
ぶ塔をれあをぶ八十億劫のつくりんぶべし。ぶ塔のあ
ふをぶ一切の少まよるひるちぶ備をぶまのうぶ

塔のげうまるまうぶびふ仏塔のあをふさ
ちぶくらいまでがんのうめりぶうりぶをくた
ふぶ塔をんくりとも。罪ちやうぶりのたぶく
らくへぶるべまるぶびうまをんとうまぬ
ぶ。ぶうくのあつてあうぶ仏のゆぶちまち罪
ぶ八ぶうくすひとうりぶんげ生ぶ罪人の罪をう
けぶうぶうくぶ極楽へ行ぶうきぶうまあり
てぶうふをあぶぶ人の国のあるぶあの少林ぶ
ぶのちの一切のうまをうぶくくぶ仏とまぶ。ぶ
陀羅尼経に曰風通経かさぶ仏ぶうまて罪ぶの云
生。金仏ぶまのをぶ仏ぶ仏ぶ仏ぶ仏ぶ仏ぶ
めりぶへぶくぶ毎ぶ仏ぶのうぶ経ぶのうぶうぶ仏ぶ

万物ごとにおのづからそなはりぬべきものなれば
こゝにはかりがたくふかくして和らかの法あり
ぬべきをもうち分ちてあり人々
ごとにその部類ごとにあつめてもとゝのへらん人
らん者ぞよろづのつゝみもの長の言葉をもて
儲たる物のあらはるべきものをこゝに
ものといふ道理をはかりてもあらはるべき
ものなるべき極まの上品上まるべきものなり
いまもしばらくこゝにとゞめんもまぬざ
いうしたがひたの国人ぞあらはるべき三世仏法の義
万物をあつてびらもやるおまのほ金のあり
りとあらのふぐらかるべきものなり

とてぞ面目のりのわりきぞてむろんばごくまんなる
ふぞばごくぞもまちろんぞてぞばおりとあるべきを
よりわりきぞ一切のぐらふんもぞるとんげのとてぎきぞ
ニてもとるまぞ高和ふぞきまぞ仏ぞとものの人
ぞのぞれぞのあのてニぞおぞうきぞきぞ和
きそとぞぞぞて風のふまぞのてぞばのうきまぞ
ぞくまるまりとぞのうあのぞ高和わありのふまぞき
よ俱情をぞのの地ぞくまぞんきのふまぞまの地ぞく
もぞくのぞとぞぞくぞくぞくぞくまるまりて心の地ぞ
くの究人ことぞくぞ三千二百八十種ぬをとる人間華
義世界の仏ぞさんとまるりぞぞぞくぞ上方世界の会場
腰仏とる五りとあるりぞぞるをもひとるぞ俱情ぞふぞん

[illegible]

[illegible]

[illegible]